

「倫敦塔」解体

——骨・塔・論争——

中原章雄

1 はじめに

今年（二〇一三年）の春、中部イングランドの古戦場に近い駐車場から、約六百年前のものと思われる遺骨が発掘されたという報道は、衝撃的な出来事であった。

遺骨の主は、シェイクスピアの歴史劇の主人公にもなった、悪名高いリチャード三世と推定され、伝説的となっている、強度の身体障害の跡が歴然と残されていたと言うのである。

この報道による驚きの念は、一般の日本人よりも冥界の夏目漱石の方が大きかったかもしれない。漱石は初期の作「倫敦塔」の中で、リチャード三世のことに、控え目にはあるが、言及しているからである。

ロンドン塔を訪れた留学期の漱石（厳密には夏目金之助と呼ぶべきかもしれないが）と、帰国直後の漱石について、このところ特に関心のあった筆者は、遺骨発掘の報によって、その思いがさらに高まったような気になった。

もっとも、気持ちが高まりはしたが、少し調べてみると、「倫敦塔」という作は、意外に理解しにくい点があることも分かってきた。

リチャード三世の遺骨は、「倫敦塔」の再読を促すと同時に、個人的な思い出が許されるならば、最初にイギリスに留学した時にロンドンの肖像画画廊で「リチャード三世展」を見たことを久しぶりに思い出させることにもなった。

個人的な記憶を続けることがさらに許されるならば、当時の日本ではシェイクスピア学者として誰よりもよく知られていた、ドーヴァ・ウィルソン校訂の『リチャード三世』本の口絵で見た王の肖像をとりわけ懐かしく思い出すことにもなった。その肖像は、シェイクスピアの主人公として描かれた悪逆非道な王に似つかわしい人物を描いたと見るとともに、どこか言い知れない悲しみを秘めた人間にも見えるのであった。

「リチャード三世展」のカタログは、今も手元にある。私がイギリス滞在中の約一年間に見た、いくつかの展覧会のカタログ中でも、最も立派な大判一五〇ページほどの大冊で、写真版として収録されたさまざまな王の表情は、それだけ画一的伝説が支配しようとするのに異を唱えようとしている如くにも思える。

ところで、今日の日本人は、ロンドン塔なら知っている。行ったことがあるという人も多いであろう。「塔」は明治初年の岩倉使節団の報告書以来、日本人には未知の場所ではない。けれども、だからといって、漱石の作が理解しやすくなったとは限らない。

たしかに、「倫敦塔」には意外なことが書かれているわけではない。異常な事件が起こるのでもない。にもかかわらず、これまでの目ぼしい「倫敦塔」論を読んでも、この作が決してくみし易い、とは言えないように思われる。

「倫敦塔」は、留学生夏目金之助像とかかかわると同時に、作家夏目漱石の誕生を告げる作でもある。このことを再確認しつつ、論を進めることにしたい。それにしても、六〇〇年の歳月を経て発掘されたりチャード王の遺骨は、学者たちの喧しい論争を尻目にかけて、「俺は、ずっとここに居たぞ」叫んでいるかのようでないか。

2 「倫敦塔」の位置

夏目漱石は、彼の日記によると、明治三十二年十月二十八日の晩、ロンドンに着いている。それから一週間ほどの間、新しく留学地に着いた研究者らしく、通常の日程を消化している。当時の日本公使館に行ったり、ロンドンの知人に会ってもいる。ケンブリッジに行って一泊し、大学を見学する。また当時、ロンドンの大英博物館は、比類のない図書・文献を所蔵する図書館を構内に持った研究機関でもあった（二十世紀末に図書館が分離独立するまで、この状態が続く）。しかし漱石は図書閲覧の手続きもせず、早々と立ち去ったようである。

このように見てくると、最初の一週間の留生活のうち、特異なのは、ロンドン塔見学である。言うまでもなく、ロンドン塔は、当時から今日も、ロンドン観光の人気のあるスポットにはちがいない。それにしても、漱石が留学候補地のケンブリッジや、大英博物館よりも「塔」を優先させたのは何故だろうか。

大英博物館が漱石の最初の宿の目と鼻の先にあるのに対し、「塔」は、ブルームズベリー地区の彼の宿から行くと、「倫敦塔」の冒頭に自虐的・諧謔的に書かれているように、かなりの距離を市中を横断して、土地の不案内を覚悟の上で辿りつかねばならなかったはずである。

江藤淳（後述）は、漱石があっさりとケンブリッジ大学留学を断念するに到った彼の内面を鋭く指摘している。それは、漱石が大英博物館の豊富な蔵書を利用しない理由として、自分が読書に際して本に書きこみする癖があるからと述べたことと、薄弱な点で奇妙に一致しているようである。

これに反して、漱石の「塔」への執着は強固であった。「倫敦塔」には、「塔」は英国の歴史を凝縮したものである。という一節がある。それが適切であるかどうかは、今は問わない。当時の留学生漱石の思いはそうであった。「塔」の重要性をそのように考え、何よりも優先的に「塔」を見る必要を述べようとしたのであろう。

もし「塔」がそれだけの重みを持つならば、「塔」見学をすませた漱石は、すでに留学生として何ほどの責務を果たしたことになる、と彼が考えたこともありえよう。留学の目的を「英語研究」と指示した文部省に対して、漱石は、わざわざ「英文学」としても良いかを問い合わせたほどの、律儀な留学生であった。

のちに漱石は「文学論」の構築のため、下宿に閉じこもることになる。閉じこもった漱石にとって、「塔」の見学により英国の歴史を実地に学習済みであることは、かなりの安堵感を与えたことであろう。当然その印象を見事な文章で復元することにも、すでに自信を持っていたはずである。

漱石のロンドン塔への関心は、すでに早くから、恐らく青年時代から始まっていたのではないかと思われる節がある。それは、漱石の蔵書目録と、全集に収録されている、蔵書への書き入れから推定できるように思われる。

漱石はシェイクスピアの劇については、いくつかの版を所蔵している。出版年から、留学中、あ

るいは帰国後に購入したことが明白な版も多いが、古いものではヴィクトリア朝中期の版もある。これらは、彼が青年時代に読んだ版であろう。

私が注目したいのは、これらの古い版で、漱石は『リチャード二世』、『リチャード三世』という、ロンドン塔に王が幽閉されたり、また逆に臣下を幽閉する場面が登場する劇をすでに読んでおり、しかも相当に綿密な書き入れを残していることである。

のちに東京大学で講義する、いわゆる大悲劇を別にすると、『ロミオとジュリエット』、『お気に召すまま』、『テンペスト』のような一般に知られている劇よりも、地味な史劇を、明らかに留学以前に、ロンドン塔を舞台とし、「倫敦塔」に描かれることになる場面を含んだ劇を、古い版ですでに読んでいたと考えられる事実は、特記するに値しよう。

そうであるとしても、漱石の関心が「塔」の閉鎖的な空間にあるのか、幽閉された人物の運命にあるのか、あるいはその双方にあるのか、もちろん断定はできないし、今はその必要もない。

しかしながら、漱石は優れた視覚型の文学者である。彼の頭の中では、実際に「塔」を見るよりもかなり早い時点で、シェイクスピア劇の精読によって、たんに関心、好奇心だけでなく、豊富な幻像が生まれていたのかもしれない。「塔」の見学は彼にとってむしろ、確認ではなかったか。漱石の性急な駆け付け方は、そのためではなかったか。

これは、もちろん推測である。しかし、彼が「御殿場の兎」と自嘲しつつも、戸惑い狼狽えながらロンドンを横断して辿りつく熱意を見ると、それほど見当違いではなからう。

テムズを隔てて、「塔」をはじめて見た時の気持は、「倫敦塔」のテキストに存分に書かれている。既にそれだけの感慨を催した上で、「塔」に入っていくのである。

二ヶ月の船旅、汽車の旅を経た漱石と違って、今日の「塔」見物は、空港に降り立つと、観光バスが「塔」まで眠っている間に運んでくれさえするであろう。世紀転換期に、漱石が経験した感慨をいま復元するのは至難の業であろう。

しかしながら、帰国後、『帝国文学』に掲載され、漱石の第一著作集『漾虚集』の巻頭を飾ったのは、こうした体験を経て実った作だったのである。

3 江藤淳の「倫敦塔」

漱石研究は、小宮豊隆に始まるとするのが定説である。「倫敦塔」論の場合もそうであるかもしれない。けれども、小宮の「倫敦塔」論は、きわめて平板であり、あとで言及することにしたい。

江藤淳と初期の漱石に関しては、江藤が慶応大学に提出した博士論文『漱石とアーサー王伝説の研究』が重要である。また、彼の評伝『漱石とその時代』の第二部は、その大部分を漱石の留学期に費しており、密接な関係がある。この評伝については後で述べることにして、それに先行して書かれた「ロンドン・漱石・ターナー」など三つのエッセイのことを先に書いておきたい。

三つのエッセイは、評伝執筆の予備調査として、一九七〇年代の初めに、江藤が短期間ロンドンに滞在した時のことを綴ったものであった。

印象的だったのは、すでに四十歳に近いと思われる評論家が、異郷で新しく絵画芸術に接した歓びが、若々しいとさえ見える感激をまじえて、率直に表現されていると思えたからであった。当時はまだイギリスの地を踏んだことがなかったゆえに、私には余計にエッセイが新鮮な魅力に溢れて

いるように思われたのかもしれない。

いま読み返してみると、それらのエッセイは、当然別の色彩を帯びているように見える。けれども、初めて読んだ時は、七〇年前後のロンドンの輝きをバックにして留学期の漱石とイギリスの絵画を結びつける発想自体に新しさを感じたのであった。

再読した感想では、ターナーで始めて、徐々に焦点をずらすかのように移行しつつ、最後に「世紀末芸術」に辿りつく辺りに、老練な評論家の筆遣いをどうしても感じてしまう。とはいえ、七〇年代の初めに感じたセンチメントは今も懐かしく蘇ってくるようである。

それというのも、詳細な評伝自体に接した時に、先行する三つのエッセイと異なる奇妙な違和感を感じたからである。だが、私はエッセイに少しとらわれ過ぎたかもしれない。評伝に従って、留学生漱石を見なければならぬ。

江藤の伝記では、漱石が明治三十三年十月二十八日の晩にロンドンに着いたことを日記から引用したのち、三十一日にロンドン橋、ロンドン塔などを見たことも日記からの引用で済ませている（これらの固有名詞を漱石は英文で綴っている）。

次に、夜は観劇に過したことも日記を引用したのち、伝記作者は次のように書く。

芝居見物に出かけた金之助は、ロートレックまがいのポスターをいくつも見たに違いない。それらはパリの世紀末趣味を反映していたが、どこか微妙に薄汚れていた。事実それは、ある全般的な崩壊を象徴していないこともなかった。英国の社会は、「日の没することのない」繁栄の陰で、かつて例のない変質を蒙りつつあったからである。

このあとに、「英国の農業は、すでに壊滅の状態に陥っていた」という文がパラグラフを改めて続く。これらの広漠とした概観によって、江藤は何を説明しようとするのであろうか。さりげなく「金之助」の危機を示唆しようとするのであろうか。

先に見たように、ロンドン到着直後の漱石については、ロンドン塔訪問が突出した出来事であろう。ところが、何よりも驚くべきことは、伝記作者江藤淳は、「塔」の訪問については、簡潔きわまりない、英文の日記を引用するだけで済ませているのである。

漱石が「倫敦塔」を書くのは、もちろん帰国後のことである。まだこの作自体に触れる必要はないであろう。けれども、漱石が留学候補地のケンブリッジも差し置いて、「塔」に真っ先に駆けつけた事実と、「猫」を除けば、最初の創作となる短編を書き上げるほどの印象を「塔」が与えたことを素通りすることは、伝記作者として許されることではなからう。

江藤は九〇年代の初めに、『漾虚集』の全短編につき解説を岩波文庫版に書いている。そこでも「倫敦塔」に関しては、わかり切った材源のことを主に書いて、お茶を濁しているかのようである。

要するに、江藤は、「倫敦塔」についても、留学生金之助の「塔」訪問についても、不思議なほど、冷淡で素っ気ない態度を見せている。それだけ、留学期の漱石の危機、彼の言う「崩壊」を強調しようとしているのだろうか。さらに、それと関連するのであろうが、嫂登世へ彼の思慕を実証しようと考えているのであろうか。

江藤のアーサー王伝説の研究については、様々な評価がありえよう。しかしながら、それとは別に、英文学を学んだ江藤淳が「倫敦塔」をもう少し丁寧に論じてもよかったはずである。

本稿の範囲からはずれるが、「危機」について一言するならば、江藤の「危機」の説明は説得力が

十分ではないであろう。しかし、漱石がその「危機」なるものを越えて、小説家として見事に再生するプロセスは、さらに説得力が十分でないであろう。

江藤の描く留学生夏目金之助は、サクセス・ストーリー『アメリカと私』の作者によって書かれている。だが、あの本は本当に「サクセス・ストーリー」だったのだろうか。江藤の最期が悲劇的であったから言うのではない。伝記『漱石とその時代』は、成功者の自負をひっつけて登場した評論家によって書かれている。伝記は未完に終わってしまった。けれども、完結しようが、未完であろうが、あまりにも無理をかかえた伝記であった。俊敏な批評家が、無理の巨大さを知らなかったはずはない。

「倫敦塔」をパスした時に、江藤はすでにそのことを感じていたのかもしれない。

〔間奏曲—論争とその周辺〕

近年の漱石論の中で、名著の誉れ高い越智治雄氏の『漱石私論』（一九七一年）についても論じたかと思っていて。この本には『漾虚集』の一面」という章があり、その最初の節が「倫敦塔」論になっている。

そこでは、「塔」の囚人たちが爪で書く文字に、「生きることは書くことだった」という漱石自身の運命を読み取ろうとする解釈が示されているようである。示唆的な読みではあるが、この時期の漱石像としては納得できなかった。彼はこの時期には、教壇を放棄して、小説家へと飛躍的な転身を考えていたはずである。「書く」ことの意味が決定的に違っていただけではなかろうか。また、『漱石私論』全体の特徴である、大胆な説をまじえつつも、概して慎重な論の運びとこの点では異なるものを感じたのであった。

しかしながら、『漱石私論』にはもっと忘れがたい記憶がある。私の所持しているコピーには、この書の出版当時の書評類が張りつけてある。前田愛氏の「越智治雄さんのこと」も、その中の一つで、「六月二十四日に越智治雄さんが亡くなった」と書き出されていることが示すように、追悼文である。当時の文芸雑誌からの切り抜きであることは明らかなのだが、雑誌名、号数を記すのを忘れていて。

追悼文は、『漱石私論』が学界で高い評価を得た一方で、一九七六年の日本近代文学会の漱石シンポジウムで、パネラーの一人であった関西大学のT氏から、「仮借ない、逐条審議的な批判」を浴びせられたことを述べたものであった。前田氏自身も参加していたシンポジウムで、会場が異様な雰囲気にも包まれたとも記されている。攻撃された側の越智氏は「風邪をこじらせて出席できなかった」という。

よその学会の、しかも四十年近く前の論戦のことを、漱石論とはいえ書く気になったのは、その場のことを、当日出席していた森本修さんから、その直後に、臨場感あふれる報告を聞いたからであった。森本氏は二十年以上前に亡くなったが、当時は立命館大学文学部の同僚であって、私の漱石に対する関心を知っていて、詳しく話してくれたのであった。

けれども、専攻の異なる私にあれだけ詳しく語ってくれたのは、大学紛争の時期に、辞職者続出の文学部で、学生問題とともに深くかかわったことも大きかったようである。森本さんは専攻の助手歴が長く、母校出身者であったから、紛争時には対立する学生集団の双方と均等な付き合いを迫

られる困難な立場にあったはずである。

私の方は、学部の学生主事（代理）という役職ではあったが経験も知識もなく、貧弱な身体で、学生両派のせめぎ合いを何とか辛うじて凌いでゆくだけの日々であった。

森本さんにとって最も辛かったのは、校庭であの「わだつみ像」が破壊された日であったろう。全共闘派の別働隊が文学部棟や研究室に侵入し、森本研究室の書物や備品を破壊したのだった。学生集団と森本さんの間にそのころ何があったか、私は何も知らない。あの日のことを書くのは、学生たちの行為を四十年以上経過した今、改めて非難しようとするのでは毛頭ない。わだつみ像の件については、『立命館百年史』がすでに十分な批判を加えている。私が今もありありと思いつかべ、記憶しているのは、森本さんが、いかにも情なさそうな表情を浮かべながら、破壊された物品や書籍を拾い集め、掃除していた姿である。

昔の話である。けれども、それほど昔とはいえないかもしれない。森本さんの所属専攻は両派の対立がとりわけ激烈であったが、いまもなお、当時の反全共闘派で、現役の政治家として中央で活躍している、かつての学生もいるのだから。

越智氏の『漱石私論』をめぐる論戦も、アーサー王伝説論争も、それらに関わった人たち、少なくとも主な人達は皆死んでしまった。兵どもが夢のあと、などと言えば生きながらえた者の思いあがりであるかもしれない。しかしながら、漱石をめぐる様々な論戦を振り返って、私には二つのことが浮んでくるように思われる。

一つは、漱石は自分の作品について、このような論戦も起こりうることを、ある程度、彼自身予見していたのではないか、それはテキストそのものの中に、ある意味では書かれているのではないか、ということである。

もう一つは、この「間奏曲」は本題から著しくそれたようだが、必ずしもそうとは限らない、のではないか、ということである。

漱石をめぐる学界内外の、まれに見る熾烈な論戦は、主として七〇年代に行われたものであった。決して時間的な近さだけを考慮するわけではないが、これらの論戦は、六〇年代から七〇年代にかけての学生反乱が直接間接に影響しているのではなからうか。

続稿では、以上のことも視野に入れながら、江藤とは違った意味で、「倫敦塔」に対し、素っ気ない、冷淡な見方としている、大岡昇平の「倫敦塔」論を取り上げ、区切りとしたい。(未完)

〔追記〕

本稿は、縦書きの手書き原稿だったが、記念号の他論文に合わせて、横書き印刷されることに異存はない。数字表記が特に見苦しくなるが、あえて訂正はしていない。ご了承お願いしたい。

なお、森本修さんといえば、何よりも芥川龍之介研究の名探偵・助手（上に記した「わだつみ像」の件の時は、助教授）として、教授会にも知られていたこと（文学部切つての特異な酒豪ぶりと共に）が、漱石研究ともかかわって、思い出深いのが、今は割愛せざるをえない。

(本学名誉教授)